第20回「海の香りのする詩」

市内小学生の部　大賞

海をテーマにした「海の香りのする詩」の受賞作品が決定しました。市内から671点、市外（県内）からは268点の応募があり、次のみなさんが入賞しました。

教育委員会生涯学習課　☎㉕1268

「優しい声」

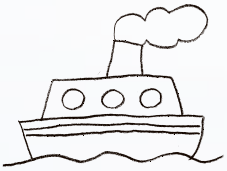
加茂小学校　六年　中井　倫世

今日はめずらしくお母さんは
船に乗って仕事へ出かけて行った

おじいちゃんと一緒に
お母さんをむかえに行った
だんだん潮の香りが強くなってきた
おじいちゃん早く早く
やっと船着き場だ
お母さんどっちから帰ってくるのかな

タプンタプンタプン
波が教えてくれた
お母さんが乗っている船
あの岩の向こう側からやってくるよ
私は波が教えてくれた方をじっとみつめる
でもお母さんの姿はまだ見えない

ふっと街灯がついた
私の黒いかげがぐっとのびた
急に心細くなった
その時



サワサワサワワ
もうすぐだよ
海からの潮風が優しく私の耳元でささやく

お母さん早く早く
気がつくとぎゅっとカいっぱい
自分の手をにぎりしめていた

その時だ
大丈夫もうすぐだよ
大丈夫あなたのお母さんを届けに来たよ
海の優しい声に私はつつみこまれた
その優しい声はお母さんのよう

そしてただいまぁ
お母さんの声に私は思わずだきついた
おかえりなさい
お母さん

私にとって海の声は優しい声

珍しく船に乗って仕事に出かけた母を待つ倫世さんの心に、波が、潮風が、海の「優しい声」がささやき届けてくれる。不安感やさまざまな心の動きを実に見事にとらえて描かれています。

倫世さんとお母さんの日常の生活の中で「優しい心」の通い合いを感じさせる素晴らしい作品です。擬音語の使い方もたいへん上手で、「優しい海の声」が聞こえるようで、母娘の絆に感動しました。（選考委員長：松田健氏評）

市内中学生の部　大賞

「桃取と海と弟」　前田　希美（鳥羽東中2年）

この夏、弟に水泳を教えた。
まだ泳ぐことはできないが、途中少し休憩をしながら休み休みだが、初めてフロートまで泳ぐことが出来た。
それでも弟は大喜びしていた。
その後ろに今年廃校になる桃取小学校が見えた。
来年から鳥羽へ通うことになる弟に、この笑顔があるのだろうかと、少し不安になった。
その時、弟が海へ飛び込んだ。
まるで海に包まれたかのように、ゲラゲラ笑っている弟を見て私は思った。
桃取はどこに行っても私達のふるさとだ。
桃取小学校は船で通う弟をまるで見送り出迎えるかのようにそこに在り続けるだろう。
海は風となり、香りとなって弟についていき見守るだろう。
そして弟はこの夏苦手な水泳に挑戦したように、新しい世界に飛び込んでいくだろう。
たくさんのものに見守られている弟は、きっと笑顔でいられるはずだ。
弟の笑顔は
桃取のきらめく海に負けない
輝いた笑顔にちがいない。

その他の受賞作品は次のとおりです。

市内小学生の部

伊良子清白賞　「海」楠木想詠（安楽島小6年）
入賞　「海　あなたは」宮浜亜唯乃（安楽島小6年）、「スーパー漁師」小久保凱生（神島小5年）、「ウニの味」上村虎太郎（弘道小6年）
奨励賞　「水平線のお客様」野村華音（加茂小5年）、「ぼくとヒジキくん」寺本航清（安楽島小5年）

市内中学生の部

伊良子清白賞　「記憶」前田優（加茂中2年）
入賞　「磯笛が聞こえる海」川口菜奈子（鳥羽東中3年）、「がんばれ　ばあちゃん」中西美紅（鳥羽東中1年）、「ハラムネセットカタ」中村麻璃朱（鳥羽東中2年）
奨励賞　「思い出の味」尾崎萌香（加茂中1年）、「夏休み最後の日」齋藤陽奈子（鳥羽東中1年）

みなさんの作品は、受賞作品集として編集し学校や関係団体などへ配布する予定です。
※敬称略

「いただきます」
～感謝の心～

「いただきます」食事の前のあいさつです。
この言葉に異議を唱えた保護者がいます。給食費を払っているのになぜ給食の時に手を合わせ、「いただきます」というあいさつを強要されなければいけないのか。宗教的儀式ではないのか。保護者の訴えで食事のあいさつを取りやめた学校があるそうです。保護者が給食費を支払っていることは事実です。しかし、お金は食べることができません。
私たちは、たくさんの生き物（動物や植物）の命をいただくことによって生かされています。食材を作る・捕る人、食材を運ぶ人、食事を作る人、たくさんの人の関わりがあって、私たちの目の前の食事をいただくことができるのです。そのことを私たちは子どもたちに伝えるべきではないでしょうか。当たり前が当たり前でなくなる心配もあります。給食は戦後の子どもたちの栄養不足を改善するために始まりました。このことでたくさんの子どもたちが救われていったのです。
また、小・中学校の教科書は、現在無償で与えられています。しかし、以前は無償ではなく、教科書が買えず学校で学べなかった子どもたちがいました。高知県の「教科書無償化の運動」をはじめとする全国各地の取り組みで、1964年度から教科書は次第に無償になりました。63歳以上の人は教科書を買った覚えがあるのです。
このようにして、先人の努力によって、豊かになったものがたくさんあると思います。そのことを後世に伝えていかないと、「当たり前」となり「感謝の心」がなくなってしまいます。時代は移り変わりますが、今の豊かな幸せをしっかり学び、次世代にきちんと伝えていきたいものです。